

序

松本裕美

『世界の日本研究』2021年号は、2部からなり、合計7本の論文を収める。第I部は、世界各地の日本研究について、国際日本文化研究センターの外国人研究員による五つのレポートを紹介する。

ケリー・フォアマン氏 (Kelly M. Foreman) の “A Review of Academic Research on Butoh within the United States” は、アメリカにおける暗黒舞踏の研究が、1980年代から現在まで、日本研究（地域研究）とダンス研究の間でどのように展開してきたかをたどる。暗黒舞踏そのものがアメリカで演じられ、それが研究の方向に影響を与えていることを指摘する。

グエン・ナム氏 (Nguyễn Nam) の “Traveling Knowledge: Publications from Japan and China in Early Twentieth-Century Vietnam” は、20世紀初頭の証言や国内に保存されている書籍を紹介しながら、フランス植民地下のベトナムにおける反植民地運動に日本の出版物や思想の影響があったことと、その流入の主な経路が中国語の翻訳書であったことについて論じる。

西野亮太氏 (Nishino Ryōta) の “Japanese Studies from the South Pacific: Present and Future Prospects as Seen from the University of the South Pacific” は、フィジーから見た南太平洋地域における日本研究の現状と発展の可能性について、グローバルな地政学的文脈と自らの教員体験を織り交ぜながら語る。

マッシミリアーノ・トマシ氏 (Massimiliano Tomasi) の “Christianity and Japanese Literature: The State of Scholarship in the Anglophone Academic Community” は、英語圏における日本の近現代キリスト教文学研究について論じる。日本文学とキリスト教の関係を軽視する傾向が強い中、プロテスタントとカトリックの思想が継続的かつ複雑な形で及ぼした影響を探ろうとする研究例を紹介する。

鄭毅氏の「日本帝国植民時代の「満洲文化遺産」——中国学界による満鉄調査研究資料の整理と利用」は、南満州鉄道株式会社が調査、収集、発行した資料（主に中国東北部に関する資料）について、成立の政治的背景、戦後の整理作業、近年の研究動向を紹介し、今後の課題を提起する。

第II部は、若手研究者による2本の研究論文を紹介する。2020年2月13日から15日に、ニューヨークのコーネルクラブにおいて第26回日文研海外シンポジウム「On the Heritage of Postcolonial Studies: Translation of the Untranslatable」（ポストコロニアルの遺産——翻訳不可能なものの翻訳）が開かれた。「国際日本研究」コンソーシアム、翰林大学日本学研究所、酒井直樹・コーネル大学教授との共催である。翻訳論の観点から日本研究をポストコロニアル研究の文脈に置き、どのように地域研究としての日本研究を超え

ることができるかを問うた。本特集は、その中の若手研究者セッションで報告した2名の論文を収録している。

趙沼振氏 (Cho So Jin) の “Japan, 1968: The Afterlives of Nichidai-Zenkyōtō” は、日本大学の全共闘運動関係者が、近年行っている記憶の記録・共有活動に注目し、自己の経験を歴史的客体として見直す挑戦について論じる。トゥールーズ=アントニン・ロイ氏 (Toulouse-Antonin Roy) の “Producing Colonial Difference at High Elevation: The Figure of the ‘Savage’ during the Late Qing and Modern Japanese Regimes in Indigenous Taiwan” は、清朝および日本の台湾統治下で、高地の先住民に対して使われた「蕃人」概念が、帝国領土の拡大と植民地の支配システム確立にどう作用したかを考察する。

最後に、本誌の体裁面の変更についても触れておきたい。前々号より紙媒体の発行を停止し、オンライン版のみの公開へと発行形態を移行したが、これに伴い、本号より判型をA5判からA4判に変更したのをはじめとして、オンライン出版に適するよう刷新をはかったものである。

本号は前号に続き、新型コロナウイルスの感染下で執筆および編集が行われた。制限の多い中、原稿を執筆して下さった著者の方々と校正・校閲作業にご尽力いただいた方々にお礼を申し上げます。この号に集まった論文は、一見、地理的、分野的にばらばらであるように見えるかもしれないが、全体を通して読んだ時に、「植民地主義」や「研究者と研究対象の関係」など、いくつかのテーマが呼応しているのがわかる。対面の行事が難しい今、本号が国際学术交流の場の一つとなれば幸いである。